

イスラエル、ガザの視覚障害者用の目薬の搬入を阻止

サイード・アルサルール(ガザの作家、英語教師) 著、脇浜義明訳、電子インティファダー、2025年12月25日



ガザ保健省の発表によれば、2023年10月以降、イスラエルの攻撃のために失明または視力障害を負ったパレスチナ人は1,500人を超える。9月6日にハーン・ユーニスのナセル総合病院でイスラエル軍狙撃兵に目を撃たれ、病院のベッドで横たわる18歳のタハ・アブ・ラビダもその一人である。

ガザ・ジェノサイド発生前には、過酷な封鎖下の中でも、視覚障害者や弱視者のための専門施設が活発に活動していた。UNRWAは視覚障害者用リハビリテーションを運営し、8～12歳の子どもにプログラムを提供していた。また、視覚障害者のために、点字機器、杖、補助器具、スポーツや音楽などレクリエーション活動も提供していた。

ガザ回廊中部のアッザハラー地区の公立学校は、目が見えない人や視力が弱い人のために中学及び高等学校教育を提供していた。

ガザ・イスラム大学も視覚障害学生を受け入れていた。同大学は、目が見えない学生がアクセスし易い施設、専門技術的ツール、献身的スタッフを備え、インクルーシブ教育を行っていた。私の親友で全盲のアハメド・アブ・アルジディはイスラム大学で英語を学び、いくつかの科目で優れた成績を収めた。「イスラム大学は私たち盲人の心に光を与えるきっかけでした」とアブ・アルジディは言った。2021年、卒業の数か月前に、アブ・アルジディは劇を書き上げ、クラスメートと一っしょに学内で上演した。2022年に卒業、デジタルの権利団体でフリーランスのコンテンツ・ライターとして働き始めた。

一変した人生

2023年10月、アブ・アルジディの人生が一変した。彼と彼の家族は北部のジャバリヤ難民キャンプの自宅から、中部のデイル・アル・バラフのテント村へ移住せざるを得なくなった。2024年5月、彼は、彼が「耐えられない」と表現した知らせを受け取った。自宅がイスラエル軍に破壊された知らせであった。目が見えない彼は、避難生活と、以前支援を受けていた専門センターと連絡が途絶したため、食料や医薬品の入手に大変苦労した。また、テント生活ではインターネット接続が不安定で仕事を続けることが出来ず、それにジャバリヤ難民キャンプの自宅で使っていたノートパソコンがなかった。

「今停戦中だけど、生活の意味の喪失は相変わらずだ」と彼は語り、10月に宣言された停戦が「当てにならない」と言った。

人生が一変したのはアブ・アルジディだけではなく。ジェノサイド以前にガザで暮らしていた1万人の視覚障害者の生活も同じであった。電子インティファダは、視覚障害者を支援する視覚障害者ガザ・フォーラム協会のアリ・トゥアイマ理事長にインタビューした。トゥアイマは、「この戦争で多くの視覚障害者が殺され、中には視覚と身体の一重障害者になった人もいます。占領軍に捕らえられ、刑務所の中で拷問を受けている障害者も多くいる」と語った。彼は、現在ガザには視覚障害者のためのリハビリテーション・センターは一つもないと言った。イスラエルは戦争初期からガザ・イスラム大学を爆撃の標的にし、2024年2月にはUNRWAのリハビリテーション・センターを運営不可能にした。トゥアイマによると、彼の協会が入っていた建物も、視覚障害者の学校も施設も、イスラエル軍によって破壊された。

今年4月、トゥアイマは、視覚障害者の生活状況を、食料や水へのアクセスや、避難生活中的補助器具や移動方法など、様々な面を調査した。「非常に厳しい状況、とても理解できない状況でした」と、7月に調査結果を発表したときに言った。この調査には450人以上の盲人や弱視者が参加した。

ジェノサイド中に彼らが遭遇した困難はたくさんあるが、住処を失うことがその一つである。イスラエル軍が避難命令を出しても、それに従って行動するのが困難で、テントからテントへと何度も避難しなければならず、そのたびにテントの配置を変えるのは大変であった。「視覚障害者の中には、少なくとも12回も避難させられ、そのたびに新しい場所に慣れようと大変な努力をしている」とトゥアイマが説明した。「男性より女性の障害者の方が苦労が多いです。医療用品の管理、生理などの衛生管理、私生活、トイレ使用、プライバシー確保など、女性独特の苦労があります。」

視覚障害者はまた、常に爆撃音に怯え、教育が途絶え、医療が受けられず、援助物資配給所へ行くのが困難なために飢餓に苦しんでいる。米国とイスラエルの怪しげな「人道財団」の配給センターが視覚障害者がアクセスできない場所に設置されている。

深刻な目の状態を抱えるムハンマド・マハニ（23）は「飢えで死にそうになった」と語った。彼は2023年10月にジャバリヤ難民キャンプからデイル・アル・バラフに避難した。2024年8月に、マハニは身分証明書用ケース、バッグ、財布などを売る行商人として働き始めて、その僅かな収入で家族の生活を支えた。「家族を養うために、無理して働きました。私たちには全く援助がありません。今でも苦しいです。経済的支援も仕事の機会もありません」と彼は語った。

介入はない

9月、ガザ保健省は、戦争前に存在した視覚障害者に、2023年10月以降さらに1500人以上が加わったと発表した。イスラエルは依然として点眼薬や治療薬のガザ搬入を阻止しているため、ほぼ4,500人が眼病のリスクに直面しており、これは5月の400人からの大幅増加である。これは、協会理事長のトゥアイマが複数の医師から得た報告と一致している。医師たちは、以前から眼疾患を抱えた人々が適切な手術器具や治療法の不足により視力を失ったり、視力低下した例が多くあると言った。また、多くの盲人がトゥアイマに点眼薬や様々な眼病に対する治療薬が必要だという嘆願をしている。25歳のジェハド・アルシャクラは緑内障である。彼が5歳のときに視神経を損傷し、緑内障となって完全に視力を失った。2024年2月にハーン・ユニス東部の自宅が爆撃されてから、彼はハーン・ユニス西部のアル・マワシ地区のテント村で暮らしている。「停戦と戦争の違いなんか感じられません。私たちの苦痛は同じです」と彼は言った。「我慢できないほど目が痛いのです」と彼は訴えた。彼は、他の約4,000人の患者と同じように、緑内障による激しい視神経痛に苦しんでいる。患者たちは必要な治療を受けないと失明する。「戦争が始まってから、薬が全然ありません」とアルシャク

ラが言った。イスラエルが必須医薬品の搬入を妨害しているために、トゥアイマの協会も医師も眼疾患を持つ人々に必要な治療を提供できない。「視覚障害者の生活に関するあらゆるものが瓦礫になってしまった。訓練も、教育も、雇用も、補助器具もなく、医薬品も不足しているとトゥアイマが言った。「私たちは地域と国際社会の組織や人権団体に、障害者全般、特に視覚障害者を支援する行動をとるように求めています。」